47

『和脩脈書』について

木場由衣登
日本鍼灸研究会

『和脩脈書』の伝本は，刊本が4種，写本が1種現存する．例えば武田科学振興財団・杏雨書屋には，寛文元（1661）年刊本（杏雨-6759）と元禄10（1697）年刊本（乾々-2954）の2種の刊本が所蔵されている．寛文元年本は，刊記に「慶長拾八癸丑歳（1613）十一月吉日 見宜堂」とあり，これに並べて「寛文元年辛丑歳五月吉日 平田長左衛門」とある．慶応大学富士川文庫所蔵の『和脩脈書』（W-7）も同じく寛文元年刊本である．

京都大学富士川文庫は，二種の『和脩脈書』を所蔵する．一つが『妙薬速効方』（ミ-66，内題『済世速効方』，寿仙坊見宜著）と合綴された『和脩脈書』の刊本であり，刊記はないものの，杏雨書屋の寛文元年刊本と同じく巻末に慶長18年の文字がある．以上，刊本『和脩脈書』の著者は全て「寿仙坊見宜」（古林見宜）である．

京大富士川文庫にはもう一つ，『経用十一方』『熊谷流薗部聞書』と合綴された写本の『和脩脈書』（イ-298）がある．この書の外題は『医方脈書』であるが，内題は『和脩脈書』となっており，著者は「道三」とある．巻末にも天正2年（1574）と「啓迪庵 道三」の文字が見える．これらから判断すると，本書の成立は天正2年で，著者は曲直瀬道三ということになる．しかし，5種の伝本の装丁は全て横長で，刊本の四種と写本はいずれも全12丁である．どの伝本も同じく4丁裏に左右の寸関尺における蔵府配当が図示されるが，京大富士川文庫写本の図は模写したかの如く刊本の図に似ている．字体も道三の直筆に似ない．富士川本の写本は，巻頭や巻末の記述から，道三が天正2年に著した様に読めるが，むしろ刊本の方が原本に見える．以上の点を総合すると，本書は古林見宜の著作と見る方が妥当と考えられる．古林見宜の没年は明暦3年（1657）であるから，成立が慶長18年でも問題はない．寛文元年は没後の刊行ということになる．

本書は全28篇より構成される．各篇に題が無いが，その内容を要約すると，①脈の字義，②脈の異体字，③脈を取る時刻，④『脈語』の危急，⑤寸関尺の三部を定める法，⑥浮中沈の三部について，⑦寸口関上尺中と名づけた意味，⑧左右三部の蔵府の次第，⑨人迎気口の脈と内傷外寒，⑩七表八裏九道の二十四脈，⑪男女と左右の脈，⑫男女の命門脈を左右で別つ理由，⑬男女の寸脈・尺脈の違い，⑭平脈の一息四動，⑮弦緊の二脈，⑯結伏の二脈，⑰肥瘦と浮沈の脈，⑱孕める人の脈と男女，⑲孕める人のいく月を知る事，⑳孕める人の脈の左右で男女を別つ法，㉑産ずる時の脈，㉒小児の脈を取る歳，㉓虎口の脈，㉔小児生まれて半年の額脈，㉕額脈の見方，㉖七表八裏九道七死脈，㉗丹渓心法の悪脈，㉘胃の気の脈，となる．

本書は平易な仮名交じりの文体で書かれており，装丁は道三が手がけた『脈訳簡略』（延宝8年刊）に似るが，内容は異なる．『和脩脈書』の書名の由来も，「平易な和語による脈の記載を脩めたもの」という意味であろう．本書以外に道三医学の脈診を伝える書は多くあり，『類証弁異全九集』『切紙』『診切枢要』『脈論口訣』『診脈口伝集』等が近しい内容を記載するが，同文はない．古林見宜の脈診の専門書はこれ一種のみであり，『本朝医人伝』が記載する見宜著『仮名脈書』とは，本書を指すのではないかと思われる．